

『もりおかの短歌』冬の部

一般部門 優秀賞十首

とも の  
友と呑み

むかしばなし よ  
昔話で酔いまわる

はちまんうら のれん おく  
八幡裏の暖簾の奥で

盛岡市 赤坂 昌信

リハビリのの

さんぽ すこ な  
散歩も少しづつ慣れて

はくちよう たかまつ いけ  
白鳥うたう高松の池

秋田県大仙市 鈴木 仁

いせい なま こえ  
威勢よき訛りの声に

しゅん か げんき もら  
旬を買い元気も貰う

みこ だ あさいち  
神子田朝市

盛岡市 河野 康夫

ほんしゅういちさむ やぶがわ  
本州一寒い藪川

ふゆ ひ や よ  
冬の日こそば屋に寄りて

あつ そばく  
熱い蕎麦食う

盛岡市 小林 貴史

ゆ たぎ おと とも  
湯の滾る音も友なり

ひと す  
ひとり棲み

なんぶ てつびん な  
南部鉄瓶撫づりて生きる

青森県青森市 鈴木 操

やがすり はかま  
矢絰と袴ですべるスキーには

いっぽん たけ  
一本の竹

めいじ つた  
明治を伝えし

盛岡市 堀米 公子

わたゆき かいうんばし とも ひ  
綿雪の開運橋に点る灯に

おとぎほろばしや  
御伽幌馬車

わた み  
渡り観るよな

釜石市 中嶋 多喜子

コロナ禍で孫達はもう盛岡に

来れぬと知って

そぞろ歩きす

盛岡市 中島 久光

しとねもの

クルミにあずき ごまにみそ

昔変わらぬ ふるさとの味

盛岡市 新里 秀明

おでんせの響き温しや

郷訛り

妣に似ていし姉さん被り

宮城県多賀城市 小松 隆夫

冬の部（ジュニア部門） 優秀賞

該当なし

【講評】

一般部門

それぞれの冬。今を生きる吐息が歌となって溢れ落ちたのだろう。コロナ禍と言われる時代も長い人生を振り返ってみればほんの一瞬の出来事なのかもしれない。それはまるで開運橋に点（とも）る灯に過ぎて行った御伽（おとぎ）幌馬車のように。

令和三年三月選 冬の部

投稿数 七十一首

選者 山本 玲子